

目次

ひろば p.2 お知らせ p.8 後記 p.10

春爛漫の美しい季節を迎えました。

しかし、その喜びも束の間、世界に目を向けると、中東ではあってはならない出来事が続いています。一日も早い収束を心より願うとともに、何よりも尊い命がこれ以上失われることのないよう、深く祈らずにはられません。

ここに、研究所ニュース Vol.10 をお届けします。

「ひろば」では、1月14日に和洋女子大学にて開催されたセミナーのご報告を、当研究所特別研究員の佐藤宏子先生にご執筆いただきました。詳細につきましては、是非本文をご覧くださいと思いますが、和洋学園を卒業された大先輩方を訪ね、その歩みとお考えを伺うこの企画は、家庭科教育研究所が発足以来、大切に続けてきた取り組みの一つです。

各地を訪ね、先輩方のお話に耳を傾ける中で、大学における教員養成の質の高さと丁寧さ、実体験として語られる日本の家庭科教育の歴史、そして、それぞれの先生方の現場に根ざした素晴らしい教育実践と、教育に注がれてきた変わらぬ情熱に、私たちは何度も心を打たれてきました。

今回のセミナーでは、『堀越千代 自営の心ー日本女子教育の先駆者ー』の執筆者である及川亜希子氏によるご講演を拝聴する機会にも恵まれ、とても貴重な時間でした。

なお、このセミナーは、将来、家庭科教員を志す和洋女子大学の学生たちとの対話という形で行われました。当日は、多くの学生が、創立者へと連なる和洋女子大学の伝統に学び、先輩方のお話に熱心に耳を傾け、そこに自分たちの未来を重ね描いているようでした。先輩たちと若い学生たちが一緒にいる教室は、何ともいえない温かな雰囲気がありました。

続く「お知らせ」には、研究所の今後に関わる大切なご案内とともに、開設当初から研究所を支えて下さった先生方、ならびにスタッフからのひとことを掲載しています。どうぞ一読ください。

「和洋卒・元家庭科教員の先輩と学生との対話セミナー」報告

家庭科教育研究所特別研究員 佐藤宏子

「和洋卒・元家庭科教員の先輩と学生との対話セミナー」が1月14日に和洋女子大学で開催されました。

2022年に創設された家庭科教育研究所が実施した活動の1つに「和洋卒・家庭科教員のライフヒストリーと家庭科の教育実践に関する調査研究」があります。本研究では、北は青森県・岩手県・秋田県から、南は沖縄・九州（佐賀・熊本・大分）まで、家庭科教員として活躍した70代後半から90代の和洋卒業生23名のインタビュー調査を実施しました。インタビューの対象者は、昭和20年代から40年代にかけて和洋学園に学び、高度経済成長や科学技術の発展、家庭生活の変容、学習指導要領の変化、男女共修の「家庭科」への移行を家庭科教員として経験し、創設者の教えである自立する道を模索し切り開いた女性たちです。この度、本調査研究を終了するにあたり、和洋学園の創立125周年に向けて刊行された『堀越千代 自営の心ー日本女子教育の先駆者ー』の執筆者である岩手日報社の及川亜希子氏、インタビュー対象者である元家庭科教員の卒業生4名を大学にお招きし、家庭科教職課程の学生との対話セミナーを実施いたしました。

最初に、岩手日報社の及川亜希子氏が「『堀越千代 自営の心ー日本女子教育の先駆者ー』を執筆して」というテーマで講演を行いました。岩手日報社は、堀越千代の古里である岩手県盛岡市に本社を持つ創刊150周年を迎える新聞社です。及川氏は、2021年に岩手日報朝刊で「自営の心 和洋女子大学の祖 堀越千代」を22回連載し、2022年に『堀越千代 自営の心ー日本女子教育の先駆者ー』（岩手日報社）を執筆されました。講演では、堀越千代の人柄や生き方、学校づくりの特長や先見性、明治・大正・昭和の女子教育などについて話され、最後に学生たちへエールを送ってくださいました。ここでは講演内容を引用しながら4点にまとめます。



及川亜希子
『堀越千代 自営の心ー日本女子教育の先駆者ー』

1. 千代先生は自然環境の厳しい雪国育ちで辛抱強く、耐えて生きていくという岩手県人らしい人柄で、岩手山が心のふるさとになっていたと思う。また、盛岡藩は戊辰戦争に敗れ、明治新政府から賊軍の汚名を着せられたことから、この無念、屈辱を江戸に出て学問で晴らそうと、青少年の育成に大変力を入れていた。こうした時代・社会の雰囲気の中で、千代先生にも反骨精神ともいえる気質があったと思う。先生はとても勤勉で漢文学、国文学、数学、習字、礼法を学んだほか、和裁だけでなくフランス式洋服裁縫、英米式洋服裁縫、男子服裁縫なども習得した。84歳から謡曲も学んでいて、人生を通して学びの日々を送った。



司会・進行：佐藤宏子



講演者：及川亜希子氏

2. 千代先生の学校づくりのキーワードは洋裁教育と教員養成だった。和装がメインだった時代に洋装に着眼して、学校教育に日本で初めて洋裁教育を取り入れた。教員養成も時流を捉えており、先を見通す力や時流を捉える才覚、新しいものにどんどん挑戦する力を持っていた。「女性の自立」を体現する千代先生の姿は、現代社会を生きる女性たちにもヒントになると思う。

3. 千代先生は時代の先を行っただけの方なので、どれだけ強いのか、「雲の上の存在」の人だと、私はずっと思っていた。でも、同窓会誌「むら竹」に掲載された千代先生の「論説講話」を読むと、人間味ある“千代さん”の姿も垣間見られ、千代先生がものすごく悩みながら進んでいたということが分かる。

4. 和洋女子大学の学生さんには「社会で活躍できる自立した女性を育てる」という千代先生の建学の精神を忘れず、自分のキャリアやライフプランを自由に選択し、自分が日々楽しいと思える働き方や生活をしていただきたい。また自立を実現するために、人とのつながり、社会とのつながりを大切にしてほしい。千代先生も旦那さんの修一郎さんにずいぶん助けられたと思う。自分を理解してくれる人がいるというのはすごく大きいことで、力になる。皆さんには例えばパートナーでもいいし、家族でも友人でも、よき理解者をつくってほしいと思う。今は学生だから、たくさん友人を作って、つまずいたときとかに一緒に話し合えるような人を大事にしてほしい。

第2部のトークセッションは、講師として黒澤知子先生（元佐賀県の高校教員、1966年被服学科卒）、鈴木満里子先生（元栃木県の特別支援学校・高校教員、1966年被服学科卒）、高瀬豊子先生（元栃木県の高校教員、1972年被服学科卒）、大貫憲子先生（元栃木県の中学校教員・小学校校長、1974年生活学科卒）の4名の卒業生をお迎えし、家庭科教育課程の学生たちから事前に集めた先生方への質問にお答えいただきました。ここでは5つの質問に絞って、先生方のお話を紹介します（カッコ内は敬称略）。



トークセッション：講師の先生方

1. 家庭科教員をしていて大変だったこと

・子育てが大変でした。昭和50年代の初めまでは佐賀の山間地帯に保育所とか保育施設はなかったので、出産して1年後から勤務するために自分で年配のおじいさんとおばあさんの家庭を探して預かってもらって、毎日お弁当を作って持って行って食べさせてもらいました（黒澤）。

・和洋には藤田トラ先生という和服を着た和裁の先生がいらっしゃって、私たちはとても厳しいご指導を受けました。少しでもちがうと先生は「お直し」と仰って、何度も直された経験があります。でも、その厳しいご指導が教職時代に生きました。私は普通高校の家政科の生徒に実習するのはすごく楽しくて、楽しい思い出しか残っていません。でも、50歳になった時、家庭科が男女共修になって、男子もはじめて家庭科の授業を受けることになり、私は工業高校に転勤になりました。1クラス40名の男子生徒に助手もなしで、調理実習の授業をするのは、ガスや包丁、食中毒の危険がありました。実習後の包丁の数の確認、布巾の消毒などに全神経を使いました。1年目は本当に辛かったです（鈴木）。



藤田トラ先生の作品と記念撮影する講師の先生方（文化資料館にて）

・家庭科の教員の大変なところは、常に勉強していかなければならないことです。日々、生活の環境が変わるので、毎年勉強していかなければ教えることができません。また、家庭科は他の教科と違って、実習が多い教科です。被服では授業中に終わらない生徒たちに放課後や休日に指導することが多くて大変でした。調理実習では準備から後片付けまで、他の教科の先生方には考えられないたくさんの時間を使いました。（高瀬）。

・一番苦労したのは被服の製作でした。被服製作の授業では、裁断、仮縫い、袖つけなどの一つひとつの段階の標本を事前に作っておいて、段階標本を生徒に見せながら授業を進めたいと思いました。でも、私は中学校の教員でしたので、調理、被服、家庭電気、住居など家庭科の全般を教えていてとても忙しく、1年生から3年生までの3学年分の段階標本を毎年少しずつ計画的に作っていました（大貫）。

2. 生徒たちが関心を持って取り組んだ学習内容

・野球の強豪校の佐賀商業高校に勤務した時、家庭科が男女共修になりました。家庭科の被服製作の授業で、男子と女子の生徒が一緒になって甲子園で野球部を応援するための卑弥呼のコスチュームを作りました。生徒たちはとても熱心に取り組みました（黒澤）。

・生徒たちにとって作品ができあがることはすごく嬉しいことです。例えば浴衣を作ると着付けも習います。みんなで着装して写真を撮ると生徒たちはとても喜んで大騒ぎするので、私も嬉しかったです。男子生徒は保育の授業をととても喜びました。模型のお人形さんで抱き方、おむつの取りかえ方、離乳食のあげ方について想像以上に喜んで実習していました（鈴木）。

・家政科には、技術検定の合格を目指して入学してくる生徒が多くいました。例えば、被服製作は和服と洋服の2つの技術検定の1級を取得する。それにプラスして食物の1級を取ると、三冠王なんて言いました。生徒たちは検定に合格するととても喜びました。また、普通科の生徒たちは、調理実習が大好きでした（高瀬）。

・中学校の生徒たちが一番喜んだのは、調理実習のスイーツ作りでした。また、住居分野の学習で、パソコンを使って自分の住みたい部屋の間取り図を作るという課題にも喜んで取り組み、将来自分はこういうお部屋に住みたいという見取り図を作り上げました。男女共修になってからは男子生徒たちが保育分野の授業に興味を持って、喜んで取り組んだのを覚えています（大貫）。

3. 大学時代に家庭科の学習内容以外で学んでおくこと

・家庭科ではもちろん講義も重要ですが、実習がとても大切です。男子校の男の子も、特別支援の肢体不自由の子どもも、普通高校の家政科の生徒も実習が大好きでした。ですから、夏休み期間中などを使って、様々な実習を経験することをお勧めします。例えば私はレザークラフトや草木染め、日光彫り、茶道、華道、書道、ニットソーイングや着物リメイクを習いました。市町村などのあらゆるところに講習できるものがありますから、そういうところに参加して、いろいろなものを身につけてほしいと思います（鈴木）。

・大学の中だけでなく、いろいろなところで、いろいろな体験をすることによって、危機管理意識とか、対応力とかが身につくと思います。皆さんは、アルバイトもなさるでしょうから、そういうところで人とのコミュニケーションのとり方とかも学んでおいたら役に立つと、管理職になってから強く思うようになりました（大貫）。

4. 伝統文化の継承、福祉教育、国際交流を取り入れた家庭科

・佐賀藩の鍋島の奥方様たちが佐賀錦を創ったと言われています。佐賀錦を織るのはとても根気のいる手仕事で、細かく精密な技術が必要なので、一日にわずかしか織ることができません。「手芸」の授業で「佐賀錦」を織ったとき、生徒たちは郷土の伝統工芸に関心をもって、とても熱心に取り組みました。家庭科の授業の中で高校生が郷土の伝統文化を知ったり、郷土愛を感じたりすることは素晴らしいことだと思います。佐賀錦を織る授業は、現在も県立牛津高校で続いているそうです（黒澤）。

・家庭クラブの4つの精神は「創造・勤労・愛情・奉仕」です。家庭科は、この4つの精神に尽きると思います。私は家庭クラブ活動で生徒たちと地域の福祉施設訪問、ボランティア活動、車椅子を寄付する活動をしました。また、モンゴルとの国際交流にも力をいれました。いくつも許可を取って、3年間毎年夏休みに代表の生徒たちとモンゴルに行って、勤務校が交流していたモンゴルの高校を訪ねて、生徒たちと交流しました。代表の生徒たちは帰国後に報告会を開き、成果を報告しました（高瀬）。

5. 和洋で学んだ学習内容や教育がどのように役立ったか

・私は生活学科で、家庭科教員の他に栄養士免許も取りましたので、学内での調理実習や実験以外にも、自衛隊や病院での栄養士実習、校外研修で国の米穀倉庫の見学などにも行きました。NHKの高校家庭科講座にお手伝いとして出演もさせていただきました。このような数々の経験は、私の自信に繋がり大変役に立ちました。また、生物学の先生の授業がとても魅力的でした。小学校の校長になったとき、生物学の先生のことを思い出して、校長訓話には自分で何かを作って持っていき、それを子どもたちに見せながら話をしました。そうしたら子どもたちは生き生きと私の話を聞いてくれました。このことは、私が和洋で学んでものすごく感動した生物学の先生の授業が私の身になっていて、それを教員になってから活かせたということだったと思います（大貫）。

・実習で非常にきめ細かい指導をしていただいたおかげで、教員になってからも困らないで教えられたと思います。それから、私は4年間寮生活をしました。寮生活の中で、寝食を共にした仲間たちと交流し、いろいろな人との交わりを経験しました。大学時代に寮生活で学んだことが、教員になってから、生徒はもちろん、保護者やボランティア活動を通して知り合った地域の人々とおつきあひするときにも大いに役立ったと思います（高瀬）。

・和洋で勉強したことはすべてが役に立っていると思います。私は退職して 20 年経ちますが、今このような高齢者になってからも和洋で学んだことがすべての基礎になって、いろいろな趣味につながって、今とても楽しんでます。皆さんも大学でたくさんのことを学んで、それを教員になった時だけではなくて、もっと将来まで続けていただきたいと思います（鈴木）。

・佐賀県の家庭科教員には、和洋の先輩、後輩が多かったです。私は和洋出身の先生方にいろいろと助けていただき、和洋の同窓生の強いつながりに感謝しましたし、和洋の卒業生で本当によかったと思いました（黒澤）。

トークセッションの後は、及川氏や会場に駆けつけてくださった先生方からコメントをいただきました。最後に家政学部長の熊谷優子先生から閉会のことばがあり、1 時間 40 分にわたる対話セミナーを終了しました。「対話セミナー」を受講した家庭科教職課程の学生からは、先輩たちのお話から学んだことが数多く寄せられました。和洋の歴史の重みと堀越千代先生の偉大さ、家庭科や家庭科教員の魅力を強く感じた学生も多くいました。先輩たちが語った現場ならではの具体的な経験、大学で基礎をしっかり身に着けることの重要性、長年の教育現場での経験に基づく数々のアドバイス、大学時代の学びが基礎となって人生全体を豊かにしたというお話は、これから教育現場に立つ学生たちにとって深い学びとなり、将来への希望につながったことと思います。

及川亜希子氏のご講演、トークセッションは、家庭科教育研究所のホームページに詳しく掲載されていますので、ぜひご覧ください。

▶▶ <https://kateika.main.jp/alumni.html>



和洋女子大学から富士山とスカイツリーを望む

お知らせ

家庭科教育研究所の活動は、この3月をもって一区切りとなります。

これまで、ほんとうに、ありがとうございました。

この4年間、みなさんと共に取り組んできた、家庭科教育の充実に向けての活動は、今後も何らかのかたちで継続してまいりたいと思います。

またどこかで再会できますことを、楽しみにしています。

特別研究員の佐藤宏子と工藤は、和洋女子大学を辞めることとなりますが、研究員として一緒に活動してきた柴田優子は、引き続き、和洋女子大学で家庭科教育・教員養成に携わります。

最後に、研究所創設から共に活動してまいりました先生方からひとこと、ご挨拶を申し上げます。

研究員 柴田優子

研究所の一員として過ごしたこの4年間は、私にとってかけがえのない時間でした。

多くのみなさまに活動に参加していただきましたこと、心より感謝申し上げます。

私自身にとっても、この研究所で培った経験とご縁は、何ものにも代えがたい財産です。

4月からは、和洋女子大学家政学部生活環境学科（旧「家政福祉学科」と旧「服飾造形学科」を統合した新学科）において、引き続き家庭科教員養成に携わってまいります。

これまで研究所として行ってきた、家庭科教員を目指す在学生への支援や、現職の先生方への学びの場の提供につきましては、今後、生活環境学科として引き継いでまいります。当面のご案内は大学ホームページにてお知らせいたします。

なお、研究所は本年度末をもって活動を終了いたしますため、今後、研究所、及び、本学の家庭科教員養成に関するご連絡は柴田宛 (shibata@wayo.ac.jp) にメールにてお寄せいただけますと幸いです。

これまでのご厚情に心より御礼申し上げますとともに、今後ともどうぞよろしく願い申し上げます。

特別研究員 佐藤宏子

家庭科教育研究所の構想案を2021年1月18日に大学に提出し、2022年のちょうど今頃、家庭科教育研究所創設に向けて動き出したことを懐かしく思い出します。この4年間、2022年11月19日（土）の設立記念シンポジウム開催にはじまり、2024年11月の国際シンポジウム開催、研究所 News の配信（Vol.1～10）、研究所勉強会（5回）、世界の家庭科シリーズ勉強会（シンガポール、フィリピン、タイ、マレーシア、韓国の5回）、在学生と卒業生の家庭科教員を対象とした交流会と授業実践研究会（5回）、「和洋卒家庭科教員のライフヒストリーと家庭科の教育実践に関する調査研究」および「家庭科の歴史ヒアリング

調査」の実施、IFHE 国際家政学会の組織会員としてアイルランドで開催された学会への出席、ARAHE アジア地区家政学会におけるポスターセッションでの研究所活動の報告、東京都立忍岡高等学校・岩手県立花巻農業高等学校・福岡おもちゃ美術館への視察、企業の研究員との懇談等、さまざまな活動を行ってまいりました。そして、研究所の活動の締めくくりとして、和洋学園の卒業生が家庭科教員として全国で活躍されてきた姿を記録にとどめ、若い学生たちに引き継ぐ「和洋卒・元家庭科教員の先輩と学生との対話セミナー」を 2026 年 1 月に開催しました。和洋に蒔いた種がいつの日か芽吹くことを願うとともに、この 4 年間の活動にご支援とご協力をいただきました皆さまに感謝申し上げます。

元研究員 久保桂子先生

昨年度まで研究所の一員として、皆様と一緒に活動いたしました。研究所の勉強会や研究所主催の在学生向け現職教員の授業の参観など、さまざまな機会を通じて家庭科教育に関わる最新の理論や実践に触れる機会を共有できました。また、研究所のニュースに掲載された会員の皆様のご寄稿は毎回興味深く、楽しく拝読しておりました。私も第 5 号のひろばに 1975 年の国際婦人年（国際女性年）に関わる記事を寄稿いたしました。その記事を読んで下さった会員の方が、私に国際婦人年の思い出の品を見せてくださり、ニュースを通じてお互いの当時の記憶がつながっていることを実感しました。研究所の活動を通じて、新しい理論や技術、さらに思いや記憶を共有でき、皆様との多くの繋がりができたことをたいへん嬉しく思っております。会員の皆様に心より感謝申し上げます。

元研究員 大石恭子先生

2021 年 6 月、柴田優子先生とともに学長室を訪れ、家庭科教育研究所の設置についてご承認いただきたい旨のプレゼンテーションを行いました。佐藤宏子先生が同年 1 月に構想案を提出されており、その実現を後押しするプレゼンでした。

和洋女子大学には家庭科教員を目指す学生が多く集まりますが、自分に自信を持ってない学生も少なくありません。そのような学生たちにとって、卒業後も安心して戻ることのできる拠り所となる場を提供したいという思いが、研究所設立の大きな動機でした。

この 4 年間は、熱い情熱とチャレンジ精神にあふれる工藤由貴子先生、本研究所の活動の大きな駆動力となってくださった佐藤宏子先生、大局を見据え明晰なご見識を示して下さる久保桂子先生、そして学生の目線に立ち、学生に寄り添いながら企画を考えてこられた柴田優子先生とともに、微力ながら取り組みを重ねてまいりました。

家庭科教員を目指す学生の皆さん、そして現職の先生方にとって、少しでもお役に立つ活動となっていたことを願うばかりです。

これまで活動にご協力くださいました皆様に、心より感謝申し上げます。

後記

研究所 NEWS は、この号をもって最終号となります。

4年間という決して長くはない時間でしたが、
本当に多くのみなさまに原稿をお寄せいただき、
会員の声を誌面に届けていただきました。

改めて、心より感謝申し上げます。

毎回みなさまから届く原稿は、私たちの想像をはるかに超えるほど充実
したもので、ページを開くたびに、読む喜びと学びを与えてくれました。

家庭科教育に関わる人たちが、立場や分野を越えて出会い、
学び合い、支え合いながら歩んでいけたら――
研究所には、そんな確かな願いを込めてきました。

その一つひとつの時間が、私たちにとって何よりの宝物です。
これまで研究所の活動を支えてくださったすべてのみなさまに、
深く御礼申し上げます。

本当に、ありがとうございました。

いつかまた、どこかでお目にかかれますように。

(編集 工藤由貴子)

